



# 日本人の心を育て、食を支えた

## 稲作と水

勤勉で協調性に富み几帳面な日本人の特質は、農耕民族であること、とりわけ稲作が生んだ文化によるものとされています。しかし、同じ稲作民族でも東南アジアの文化と日本の文化はひと味違っています。では、日本人を日本人たらしめているものはどこにあるのでしょうか。稲の栽培に詳しい元農業試験場長の熊谷健さんと、滋賀県指導農業士、虎姫町教育委員長で藤井農園の藤井吉造さんにお話をうかがいました。

### 稲作に適した我が国

「稲の最大の特徴は必要な温度条件と水が得られれば、他の作物に比べて非常に高い生産力を持ち、人口維持力が極めて大きいことです」（熊谷さん）。

世界の3大作物は、稲、小麦、トウモロコシで、このうち稲はアッサム雲南地域（左の地図参照）の起源といわれており、アジアモンスーン地帯で全体の90%強が生産されています。



アッサム・雲南地域  
中国がミャンマー及びバングラデシュと国境を接する地域

近畿地方で単位面積当たりの稲の収穫量は、小麦に比べて2倍以上（平成15年）もあり、かつ栄養価もあって、必要な温度条件と水が得られれば安定した収量が得られる作物です。

さらに、水稲には「連作が可能」という他の農産物にない優れた性質があります。連作（\*1）すると収量が減る作物は少なくなく、これを「連作障害」とか「忌地現象」と呼びます。ナス科作物やエンドウなどではよく知られている現象です。なぜ忌地が起るのかはよく分かっていません。

同じ稲でも畑作の陸稲には連作障害があるのに、水稲は毎年同じ田で延々と作り続けられるのは、稲の持つ性質よりも毎年水をたたえる水田の特性による

と考えられます。

水に恵まれたアジアモンスーン地帯を中心に稲が盛んに栽培され、水や米に大きく依存する文化が各地に誕生しました。

かんがい農業が生んだ日本人の国民性

水稲栽培には10アール（\*2）当たり1500トン（1回の水稲栽培するのに、全部で水深1.5mの水量）の水が必要ですが、「水を張って稲を作る」といっても、地域によって水を得る方法は異なります。自然現象に頼るのが「天水田」といい、雨期に水位が上昇して水浸しになった土地で稲作をする方法で、タイ、ミャンマー、バングラディシュなどで一般的です。

一方、日本では河川に築いた井堰や、ため池から水路を作り田んぼに水を供給する「人工かんがい」がほとんどです。人工かんがい施設の建設や維持管理、水を分ける方法の策定や運営は個人の力では不可能です。そこから、稲作の規模に応じて、村、そしてさらに大きな共同体で行われるようになりました。

また、毎年畦畔（右下の写真参照）を整え、「代かき」をして水を張るこの農法には、（1）雨や風で農地が浸食されない、（2）かんがい水によって養分が供給されるので土地がやせない（畑は栽培を続けると土地はやせる）、（3）張った水が雑草の生育を押しさえ気温調整の役目も果たす（東北地方で冷害が予想されるときに「深水かんがい」するのはこのため）、さらに（4）広域的に見れば水田が地下水を養い、降った雨の流出を遅らせる・・・など、他の農

法にない利点があります。

「日本の水田は先祖が長年かけて生み出した偉大なシステムで、先人の汗がしみこんだ土地です。そこから土地への愛着心や団結心の強い日本の国民性ができたのでしよう」

稲作が日本ならではの文化を生み出したと言えます。

米の味と収量は田の水の制御で決まる

今も米作りにいそしむ藤井吉造さんも、うまい米づくりの基本は水のコントロールにあると言います。「水をやりすぎても、うまい米にはなりません」

苗代の水は少なめにしておき、田植えから1カ月ほどは田に水を浅水で管理して生育を促進します。この間、減った水を補給するのですが、時間は夜。昼間にすると水温が上がらず生育の障害になるからです。稲のからだが出来たころからは、一時水を控え（中干し）ます。その後稲を刈り取る10日ほど前まで、水分を保ちながら水を入れたり控えたりを繰り返す「間断かんがい」をします。

中干しや間断かんがいといった水のコントロールをしなければ、分茎が多く草丈が伸び生育しすぎ、倒伏（稲が倒れること）しやすくなり、病害虫にも弱くなります。また水につかり続けることで酸欠をおこし、根腐れし、根の健康が侵されるからです。「根が深く育った稲は元気です。干ばつ時にも地中深くから水分を吸い上げますし、また食味を良くするミネラルなどをよ

り多く吸収しておいしい米が実ります」

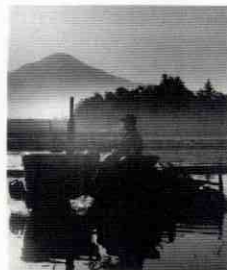
昭和30年代からコシヒカリなど味の良い品種の導入が進み、きめ細かな水管理によっておいしい米が安定して作れるようになってきました。収量も明治時代には10アール当たり200kg前後だったものが、今日では500kg、約2.5倍に増えています。

「確かに、稲作りはとも手間のかかる作業です。でも、だからこそ、まじめで勤勉な国民性が育まれたのだと思いますね。協調性も稲から学びました。今でも、川や水路の掃除を、農業をやっていない人も含めた地域全員でやっています（右下の写真参照）。水田による稲作は「日本民族の苗代」であると言われるように、水を大切にしながら農業を大事にして農耕民族であることを忘れずにいることが、今社会問題になっている心の荒廃の解決にもつながると思います」

日本文化の根底にある米は、水と植物と人間の共存で成り立つ「自然がわれわれに与えてくださった素晴らしい贈り物」です。それは、水を大切にし、水に感謝し、水に畏敬の念を持って接してきたことから生まれたのではないのでしょうか。



畦畔（けいはん・あぜ）  
水田と水田の間に土を盛り上げてつくった小さな堤。昭和53年5月、木之本町千田



代かき  
田植え前の田に水を張り、土の塊を小さく砕き泥のようにする作業。昭和160年5月、長浜市泉町



川ほり  
村中全員（総出）で行われることもある。川底の泥をさらえる作業。昭和59年3月、長浜市国友町



昔の井堰  
昭和10年代のもの



高時川頭首工  
昭和43年完成。

写真提供：吉田一郎さんより 「畦畔」「代かき」「川ほり」



熊谷 健さん  
昭和6年生まれ



藤井 吉造さん  
昭和16年・虎姫町生まれ

■お話を伺った方々

- \*1 同じ耕地に同じ種類の作物を毎年続けて作付けすること
- \*2 メートル法の面積の単位で、1アールは100平方メートル。10アールは一反とはほぼ等しい。